



高松交響楽団

第114回定期演奏会



至福のリリシズム — ドイツロマン派と新ロマン主義

2015 6.14 日 開演 14:00

香川県県民ホール 大ホール
[アルファあなぶきホール]

皆様、ようこそお越し下さいました。

今回の定期演奏会では、「至福のリリシズム」と題し、音楽の中に深い抒情性を湛えた名作3曲を演奏します。

指揮者には、往年の名指揮者カラヤンのアシスタントを務めるとともに、国内外での多数のオーケストラの正指揮者・首席指揮者等を歴任するなど、活躍の目覚ましい山下一史氏を当団として初めてお迎えしました。

ピアニストには、ベラルーシに生まれ、ラフマニノフの生誕地でもあるロシアで研鑽を積み、昨年3月に開催された第3回高松国際ピアノコンクールにおいて2位入賞を果たした俊英アンドレイ・シチコ氏を来日招聘いたしました。

どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

Program

プログラム

悲劇的序曲 (J.ブラームス)

ブラームスが、その生涯に作曲した演奏会用序曲は2曲のみで、「大学祝典序曲」と「悲劇的序曲」です。この2つはほぼ同時期に作曲されており、双子の序曲とも称されています。「大学祝典序曲」は、ブレスラウ大学から名誉博士号を贈られたブラームスが、大学への謝意を表して、当時の学生の流行歌も織り交ぜ見事な作曲技法を駆使して書きあげた賑やかで楽しい音楽となりました。しかし、本来、実直で気難しい性格であるブラームスにとっては「笑う序曲」を書いた後は「泣く序曲」を書かずにはいられなかったのです。そんな自分本来の思いを作品に込めたのが「悲劇的序曲」です。

楽曲は、激情的で暗い第1主題、祈るような推移主題、つかの間の安らぎの様な第2主題からなり、極めて緊密な一音たりとも無駄の無い構成をしています。作曲者本人が「泣く序曲」と呼んだこの曲ですが、悲しみに打ちひしがれ、絶望のうちにむせび泣いて終わるのではなく、むしろ、待ち受ける悲劇と闘い、はね飛ばすともいうような男性的な力強さがあります。



J. ブラームス
(1833 ~ 1897)

ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 (S.ラフマニノフ)

生涯に、ピアニストとしても作曲家としても大成功をおさめたラフマニノフですが、その作曲家としてのキャリアの出だしは順風満帆とはいかず、大きな挫折を味わいました。意欲作 交響曲第1番の初演が、批評家から「地獄の住人が喜ぶ音楽」と評されるなど、惨憺たる大失敗に終わったのです。すっかり自信を無くした彼は、家庭内のトラブルも手伝って心を病み、作曲のペンを持ってなくなりました。そんな彼を救ったのは、精神科医ダーリの催眠療法でした。「あなたは素敵な曲が書ける…書ける…」。本当にこの様な治療だったのかは分かっていないのですが、ともかく、治療は見事に功を奏して、ラフマニノフは作曲意欲を取り戻し、新作のピアノ協奏曲を完成しました。それがピアノ協奏曲第2番です。ピアニストの作品ならではの華麗なピアノイズムと、彼にしか書けないであろうロマンティックで美しい旋律が全編を満たしたこの曲は、たちまち大好評を得て、ラフマニノフは、作曲家としての再スタートを切ることができたのです。曲は、ダーリ医師に献呈されました。



S. ラフマニノフ
(1873 ~ 1943)

第1楽章 Moderato 教会の鐘の様に荘重な和音を、緊張感を持ってピアノが打ち鳴らし、やがて、分散和音がはじまると、それに乗って弦楽器が、物悲しくドラマティックな第1主題を低音域で奏でます。変ホ長調の第2主題は陶酔的で大変甘美なフレーズです。どちらの主題も、一度聴いたら忘れられない強い印象を残す事でしょう。悲しみと甘美さが交錯しつつ楽章は進みます。

第2楽章 Adagio sostenuto 抒情性あふれる旋律が魅力的な楽章です。ピアノの3連音符にのせて、クラリネットが主題を奏でます。素朴で静謐ながらもきわめて美しいこの主題が扱われた後、中間部へ入り、少しずつ動きを加え、ピアノが華やかなカデンツァを奏します。主題がヴァイオリンで反復されもり上がった後、ずっとその響きに浸っていたくなるような甘い後奏となりますが、最後はピアノだけが残って眠るように楽章をとじます。

第3楽章 Allegro scherzando おどけた様な管弦楽の序奏に続き、それ引き継いでピアノが第1主題を奏します。ヴァイオリンとオーボエが奏する第2主題は叙情的な美しさにあふれています。オーケストラの爆発的な盛り上がりとそれを受けての華麗なピアノのカデンツァを経て、第2主題が、ピアノとオーケストラの大合奏によって、壮麗に雄大に感動的に響き渡り、行進曲調のコーダで勇ましくフィナーレとなります。

交響曲第1番 変ロ長調「春」 (R.シューマン)

シューマンは、1838年、シューベルトの兄の所を訪問した際、シューベルトの未発表曲の楽譜を見つけました。それは、現在の交響曲第8番「ザ・グレート」にあたるものでした。友人の作曲家メンデルスゾーンとの協力の元、再演に立ち会ったシューマンは、その素晴らしさに大変感動し「私にもこんな曲が書けたらなあ」と、交響曲作曲への意欲を燃やし始めたのでした。その後、1840年に妻のクララと結婚し幸福の絶頂にあった彼は、1841年1月23日に交響曲に着手します。そこからわずか3日後1月26日の日記に「やったぞ！交響曲完成！」と書かれています。スケッチにたった3日。ものすごい速筆ぶりです。もっとも、そこから、最終完成までは一月程かかるのですが、彼からいかによどみなく音楽があふれ出てきたのがよく分かるエピソードです。

初演の際、メンデルスゾーンに宛てて、シューマンは「作曲当時に抱いていた春への憧れの気分をオーケストラで描いてみたかったのだ。」と述べています。また、一説ではこれはアドルフ・ペトガーの詩『春はめざめた』から靈感を受けたものとも言われています。楽曲は全編を通して、春を思わせるうらかな幸福感で満たされています。

シューマンは、最初はこの曲に《春の交響曲》という名を与え、各楽章に次のような標題を与えたこともあったようですが「やはり純音楽たる交響曲は言葉抜きで勝負しなければ」との思いがあったのか、最終的には削除されました。

第1楽章 — 春の始まり 第2楽章 — タベ 第3楽章 — 楽しい遊び 第4楽章 — たけなわの春

第1楽章 Andante un poco masetoso-Allegro molto vivace あたかも、春の始まりを告げるようなトランペットとホルンの輝かしいファンファーレで曲は始まります。これが曲全体のモットーになります。主部に入ると、モットーの短縮音形が第1主題として澁刺と奏でられます。第2主題はやや陰りを帯びています。楽章の後半では、この時代の交響曲には珍しくトライアングルも加わり春の気分を盛り上げます。やがて冒頭のモットーが再び高らかに鳴り響き堂々と締めくくられます。この一曲だけで出版しても作品として成立したのではと思えるような充実した楽章です。

第2楽章 Larghetto これぞシューマン節とでもいうような美しい調べが味わえる楽章です。シューマンの与えた表題「タベ」を思わせるこの楽章の主題は、大変息の長い物ですが、その最初の4つの音は、第1楽章のモットーの音形と同じなので、1楽章との統一感もあります。ヴァイオリンやチェロがたっぷりこの主題を歌います。最後に、夕べの祈りを捧げるようなトロンボーンのコラールが厳かに鳴りますが、実はこれは次楽章の主題と同じ音形であり、次の予告のような役割も担っています。そのまま次へ続きます。

第3楽章 Scherzo:Molto vivace 野性味あるインパクトの強いスケルツォ主題で始まります。これが楽章の核になる主要主題となり、その中に性格の異なる第1トリオと第2トリオが挿入されます。この2つのトリオは、元々の表題にもあった「楽しい遊び」を思わせます。第1トリオは、同一のリズムの反復を基調にした、おどけた感じの音楽。第2トリオは、急速に色々な楽器が音階を駆け上がる快活な舞曲です。そして、これらがしんみりと回想されたと思えば、いきなり走り去るように楽章は終わってしまいます。シューマンの遊び心の詰まった楽章と言えるでしょう。

第4楽章 Allegro animato e grazioso 勢いよく駆け上がる簡潔な序奏に続いて、すぐに主部に入ります。第1主題は軽やかに戯れるような雰囲気です。第2主題の前半はシューマン自身のピアノ作品クライスレリアーナの引用で、後半は、序奏音形を見得を切るように仰々しく奏でるというものです。これらを核に楽章は進み、特に、序奏音形は、熱っぽく展開されていきます。ホルンとフルートによる美しいカデンツァを経て、主部が再現され、後奏では、テンポを極限まで上げていき「春たけなわ」の活気、熱狂とともにフィナーレを迎えます。



R.シューマン
(1810 - 1856)



各種行事の記録ビデオ制作をはじめ映像情報コンテンツの制作なら

株式会社 よんでんメディアワークス

TEL (087) 818-1071
FAX (087) 818-1072
URL <http://www.ymw.co.jp>
E-mail info@ymw.co.jp



楽器堂
GAKIKDO CORPORATION
www.gakikido.jp



いい音楽との出会いを大切にします
ピアノ 管楽器 弦楽器 キターベース 打楽器 及び楽譜販売

楽器堂オーバサイオンモール高松店
高松市香西本町1-1イオンモール高松1F
TEL : 087-832-8016

楽器に関するご相談、何でも受付中です！

Profile



指揮 山下 一史 Kazufumi Yamashita

1984年桐朋学園大学卒業後、ベルリン芸術大学に留学。'86年ニコライ・マルコ国際指揮者コンクールで優勝。カラヤンのアシスタントを務め、ベルリン・フィル演奏会で急病のカラヤンの代役としてジーンズ姿のまま「第九」を指揮し、話題となる。以降、ヘルシンボリ響首席客演指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢プリンシパル・ゲスト・コンダクター、九州交響楽団常任指揮者を歴任。また、'02年 大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団常任指揮者を務め、'08年 同団名誉指揮者に就任。'06年 仙台フィルハーモニー管弦楽団の指揮者として迎えられ、R.シュトラウス「英雄の生涯」、リムスキー＝コルサコフ「シェエラザード」などのCD制作を行うなど積極的な活動を展開。'09～'12年 同団正指揮者。'08年 愛知県文化振興財団主催ヴェルディ「ファルスタッフ」で大きな成果を上げ、「第17回三菱UFJ 信託音楽賞」を受賞。'09年 サンクトペテルブルク交響楽団定期で大成功を取めた。また、'11年 シューマン「ゲノフェーフ」日本舞台初演や、'13年には水野修孝 歌劇「天守物語」を行うなど、着実な成果を上げ注目を浴びている。



ピアノ アンドレイ・シチコ Andrei Shyckko

【第3回 TIPC 高松国際ピアノコンクール2位】

'94年ベラルーシ生まれ。'07年 ブルトナー国際ジュニアピアノコンクール 第1位。'10年 リカチュフ学術員記念第15回国際ピアノコンクール「才能の祭典」 最優秀賞等、多数の受賞を経て、'14年3月に開催された第3回高松国際ピアノコンクール2位受賞。母国ベラルーシでは、国立オーケストラ協会、国立ベラルーシ交響楽団、国立セントピーターズブルグ交響楽団をはじめとするオーケストラとも共演し、ラジオやテレビ向けの録音や出演も数多くこなす。日本国内でも、昨年秋、仙台・東京・名古屋・大阪での日本縦断のソロリサイタル（カワイ音楽振興会主催）に出演し好評を博すなど、今後の活躍が大いに期待されるピアニスト。ベラルーシ国立音楽アカデミーにてナタリア・タシュチリーナ教授に師事し、現在、チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院に在学中。



コンサートマスター 福崎至佐子 Hisako Fukuzaki

東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。ヴァイオリンを故 神崎初美、故 巖本真理、故 岩崎洋三、ボヤン・レチュフ、徳永二男に、室内楽を故 ルイ・グレーラーの各氏に師事。日本フィルハーモニー交響楽団を経て1972年、新日本フィルハーモニー交響楽団アシスタントコンサートマスターに就任。コンサートマスターのルイ・グレーラー氏と弦楽四重奏を組みTV、FM東京、CM、映画音楽、レコーディングに活躍する。1985年、高松に帰郷し、ゴールドブレンドコンサート、四国二期会オペラ、四国学院大学メソシア演奏会などでコンサートマスターをつとめる。現在、高松大学発達科学部教授。香川大学教育学部講師。かがわジュニア・フィルハーモニックオーケストラ(KJO)音楽監督。高松交響楽団常任コンサートマスター。新日本フィルハーモニー交響楽団団友。日本演奏連盟会員。日本クラシック音楽コンクール・全四国音楽コンクール・山陽学生音楽コンクール等審査員。平成13年度「香川県教育文化功労者表彰」、第42回「四国新聞文化賞」、平成16年度「香川県文化功労者表彰」受賞、第67回「山陽新聞賞（文化功労）」受賞。平成21年度地域文化功労者文部科学大臣賞受賞。第20回(2011年)第23回(2014年)日本クラシック音楽協会優秀指導者賞受賞。

管弦楽 高松交響楽団 Takamatsu Symphony Orchestra



1951(昭和26)年8月、故 緒方益閑氏が県内の有志を募って創立。同年11月香川県公会堂において第1回定期演奏会を開催し、高松に初めてオーケストラの灯を燈す。爾來、半世紀以上に亘る活動を続け、2016年に創立65周年を迎える。これまで110回を超える定期演奏会をはじめ、県内外での特別演奏会、青少年を対象にした音楽教室の実施、香川県県民ホール開館20周年記念オペラ「蝶々夫人」全幕公演(2008年)、サンポートホール高松開館5周年記念「カシミナ・プラナー(バレエ付き)」公演(2009年)をはじめ、オペラ・バレエ等の他団体や地元音楽家との共演など地域に深く根ざした幅広い活動を積み重ねている。2001年に迎えた創立50周年を機に新たな半世紀に向けた取り組みとして、高響団員を中心に新たに編成された「コレギウム・ムジクム高松」、「高松オペラシティ・オーケストラ」などの多面的なオーケストラ活動を展開している。さらには2001年より香川県の主催事業となった「かがわジュニア・フィルハーモニックオーケストラ(KJO)」も、2003年1月に設立された「丸亀シティフィルハーモニックオーケストラ(MCO)」への演奏・運営面での全面協力など、地域音楽文化の核ともいえる重要な役割を担う香川のマスター・オーケストラとして様々な取り組みを行っている。1987年、地方文化の発展に大きく貢献した功績から音楽団体として四国で初めての「地域文化功労者表彰」を文部大臣より受賞。2008年、香川県より栄えある第1回「文化芸術選奨」を受賞。現在、オーケストラの団員数は、約150名。